

アイデンティティ

日本の「自己規定」と 逆転の発想

広報文化外交の転換

青山学院大学特別招聘教授

小倉 和夫



「日本のソフトパワー」や「日本文化の発信」といった言葉がよく聞かれる。しかし、その場合、こうした言葉の根底を成すべき「日本」なるものは、どのように自己規定されたものなのか、国際社会において強調すべき日本の特質、日本の姿とは何なのか、という基本的問題は、脇に置かれたままになっている。

しかし広い意味での文化外交、国際広報戦略を考えるには、まず日本自身の「自己規定」（アイデンティティ）が明確にされなければならない。

日本の「自己規定」の回顧

第2次大戦によって、日本は、自己規定の中心

核の大転換を行わねばならなかった。

かつて、富国強兵と東洋の国際秩序の変革を目指した日本は、平和でかつ国際ルールに従う従順な国へと転換した。ここでは、日本の広報文化外交は、戦後しばらくの間、いわば「ない、ない、ない外交」であった。軍国主義国家では「ない、安売りで世界市場を荒らす国では「ない」——そのことを世界に示すことが日本の文化広報外交であり、またそれは、平和、民主、経済再建を目指す日本という自己規定および目標と重なっていた。

この「ない、ない外交」は、外交当局が世界に配布してきた生花カレンダーに象徴されていた。「カレンダー」は日本の明日への真剣な取り組みを

象徴し、「生花」は平和な日本の姿を暗示していた。

それからしばらくたつと日本の広報文化外交は、「雪を頂いた富士山のふもとを走る新幹線」に代表されるようになった。軍国主義ではない、安売りをしない日本から、経済的技術的に発達した「先進国」となった日本——それが日本の自己規定となり、そのことを強調するためにも、雪の日本のイメージが押し出された。なぜなら「雪」は、先進国、すなわち北側の陣営のシンボルだからであった。

この時代の広報文化外交は、いわば（先進国に）「なった、なった外交」であったといえる。

やがて日本が経済大国化してゆくに伴って、日本は単なる先進国の一員ではなく、「ダンナ衆の一人」となり、またそうなるうとした。

国際貢献が叫ばれ、地方の国際化が合言葉となり、ダンナとしての風格、品格が問題とされた。文化外交が強調され、金持ちであるだけではなく、文化豊かな日本のイメージを強化する努力が展開された。同時に、国際社会において金使いの荒い日

本への風当たりが強まったことに対応して、アメリカとの「パートナーシップ」が強調され、アジアに対する「謝罪」姿勢が明確化された。

自衛隊の海外派遣、国連安保理の常任理事国入りへの努力、過去の「歴史認識」問題への取り組み——これらすべては、実は、日本の自己規定が新しい段階に入ったことを意味していた。言ってみれば、この時期の日本の広報文化外交は（しかじかのことを）「やる、やる外交」であり、自らを国際社会の中のダンナ衆の一員として位置付けるといって自己規定を基礎とするものであった。

しかし、「ジャパンアズナンバーワン」の時代は永続しなかった。「失われた十年」の間の経済の停滞、「破壊」をモットーとした政権の登場、そして、政治の不安定、さらには中国の台頭と国際テロリズムの横行——これらすべては、逆に日本を内向き志向へと追い込んでいった。そこでは、日本は、好かれる日本、愛される日本であればよいとする風潮が静かに広まった。古い伝統と超現代の共存と調和なるものは、一見伝統とは関係ない

かのように見える超現代の旗手たちによって、逆に巧妙に利用されるようになった。

日本の自己規定は、いわば「かわいい、すてきな日本」「クールな日本」になった（だからこそ、その反動として一部に「勇ましい日本」の叫びが、反中国の潮流と重なって渦巻いている）。

自己の定型（ステレオタイプ）化

こうした過程を振り返ってみると、そこに一つの、継続した線を感じることができる。自己の「定型化」である。

「ない、ない外交」は、まさに軍国主義、安売りの日本という「世界の目」をそのまま一応うのみにした上で、そうでない日本を強調する文化広報外交であった。ここでは、日本に対するステレオタイプを消そうとするあまり、平和と経済建設に努める日本という形の「定型」が強化された。

日本の平和主義とは本当は何なのか、経済再建とは国内の革命勢力を抑えるための方便であったのではないか——そうした側面は一切捨象された。

先進国に「なった、なった日本」についても、実は、環境汚染問題や社会的弱者対策などをほとんど放置した側面は無視された。ダンナ衆になって「やる、やる」と言った日本は、自衛隊の海外派遣の問題にせよ、アジアの国々への謝罪問題にせよ、一種の「踊り場」で踊りを（確かによく見ればかなり見事な踊りではあったが）踊ったにすぎず、新しい東アジア外交の新展開や軍事力の行使についての「モラトリアム」は依然として基本的には継続された。ここでも、ある種の自己偽善という意味での自己の「定型化」は進行した。

いずれにしても、この一連の過程は、世界の日本を見る目を日本が意識し、それに合わせて自己規定を行い、自らをその方向に押し進めていった過程にほかならない。

しかし、かつては、この自己のステレオタイプ化は、単に国際社会における日本のイメージに合わせるということだけではなく、自己を革新してゆく意欲によって裏打ちされていた。平和で民主的な日本、先進国日本、ダンナ衆の一員の日本——

それぞれには国としての目標があり、広報文化外交は、それに「運動」していた。

ところが、今やこの「運動」は（音も立てずに）崩れつつある。「かわいい、すてきな日本」は、一つの「現象」の表現にすぎず、ある種の虚構の世界が現実化されたものにすぎない。しかも、その現実には、コスプレやオタク文化に表れているように虚構と現実の混同の世界の表現である。

「かわいい、すてきな日本」は、その意味で、虚構の日本である（近年、政府が派遣しているコスプレの「かわいい大使」は、そのシンボルとも言える）。

これに対して、日本の真の姿は、むしろ、優しい日本、美しい日本、高度に発展した産業社会でありながら、住みやすく、教育と福祉と安全対策と環境対策が行き届いた国であるところがあり、コスプレやオタク文化は、それに対する若者たちの、静かな、そして無害な反逆にすぎないという見方もあるであろう。

問題は、そのいずれが真実であるとしても、そ

うした「日本」は、世界からの批判や風当たりに対処し、それに合わせて日本の新しい生き方を確立してゆくという側面を持っておらず、いわば自己満足的な「日本」であることだ。

「ないない」日本、「なったなった」日本、「やるやる」日本は、いずれも、そうしなければならぬ（国際社会からの）外的刺激と、そうなりたいたい（日本の）内的欲求の結び付いたものであった。しかし、「かわいい日本」は、そうではあるまい。いわばここで、自己規定外交は終わりを告げたのである。しかもこの「かわいい日本」という自己規定には一つの大きな落とし穴が潜んでいる。

「かわいい日本、すてきな日本」は（台湾は別として）肝心の日本の隣国たる中国や韓国では必ずしも十分認知されていないことである。韓流ブームや日本の現代若者文化の浸透にもかかわらず、政治的事件が起こるごとに韓国や中国の対日反応は、日本が「かわいい日本、すてきな日本」に安住することに警鐘を鳴らしているといえる。

自らを「かわいい」と「定型化」した日本とは

別の「日本」がそこには存在するのだ。

もう一人の「他者」たる中国

ここで、自己規定アイデンティティの確立とは何かをもう一度考えてみる必要がある。

そもそも、自己規定を行うには「他者」を必要とする。他人という鏡があり、そこに映る自分を見てこそ自己が確立される。日本にとって長年、その「他者」は、欧米（第2次大戦後は、主としてアメリカ）であった。

アメリカは「他者」であったが故に、その価値観を日本が受容し、それに対応し（同時に）反発することによって日本の自己が確立されていった（だからこそアメリカへの「従属感」とそこからの離脱意欲は、アメリカ的なものの受容や同化のプロセスに不可欠の表と裏の側面であった）。

しかし、もし中国の経済発展がさらに続き、政治的安定もそれなりに維持されてゆくとすれば（この仮定自体、長期的には問題であるが、当面そうだと仮定すれば）、日本は自らの自己規定の上で

「他者」としての中国と、真剣に向き合わねばならぬことになる。

これは何を意味するか。

「経済発展を遂げ、しかもアジアの伝統文化の歴史を持つ国」としての日本の長年の自己規定は、ある種の危機に直面している。すなわち、今や巨大な中国が、同じ目標の自己規定を自らに課し、その強化を目指し、それを世界に発信していることによって、「日本」は国際社会において影が薄くなってゆく恐れが生じているのである。

昨今、国際社会における日本の存在感の減退を嘆く識者が多いが、日本の自己規定の仕方をそのままにして、中国に対抗し、アメリカに物を言おうとしても効果的でないことは明らかである。

そうであるならば、日本の「新しい」自己規定とそれに根差した広報文化外交は、いかにあるべきなのであろうか。それには、ある種の逆転の発想が必要ではないか。

まず重要なことは、日本にとっての「他者」の転換である。欧米ではなく、今や日本は中国を「他

者」と見なし、それと日本との差別化を明確化する
 ことが新しい自己規定の第一歩ではなかるうか。
 日本と中国との大きな違いの一つは、第2次大
 戦後、日本は、戦鬪行為に参加せず、平和を守り、
 また原水爆を保持してこなかったという点である。

このような戦争と平和の問題についての日本と
 中国との違いをさらに明確に提示することこそ、
 中国との「差別化」の一側面であろう（この点で
 は、日米関係の根本に横たわる矛盾と、ある種の
 「偽善」にも再検討が加えられねばなるまい）。

このことの論理的帰結として、平和国家日本の
 実体をどのように中国国民に理解せしめるかと言
 うところに、日本の広報文化外交の中心が置かれ
 ねばならないことになる（中国人の多くが、い
 まだに日本を軍国主義国と見なしている現状を想
 起し、それに対する広報文化外交の展開を考える
 ことこそ重要である）。

次に民主、人権、平等、自由といった価値観が
 政治的、社会的に浸透した日本と、いまだこうし
 た点について、さまざまな問題を抱える中国との

差別化である。人権、民主に係る問題についての
 日本の対中対応も、広報文化外交の一環として再
 検討されなければならない（中国人の対日認識
 ——例えば、日本軍国主義論——と中国内部の民
 主化の問題とは、かなりの程度連動していると見
 られることに注意すべきであろう）。

この点とも関連して、いわゆる「謝罪」や過去
 の歴史についての認識問題がある。

中国や韓国への「謝罪」は、日中友好や日韓友
 好のためというより、（また、相手国の国民感情に
 配慮するための方策というよりも）むしろ、中国
 における政治の民主化や人権尊重、韓国における
 権威主義の打破や日本の植民地支配についての韓
 国自身の自己責任の検証といった事柄について
 （政府ではなく）日本国民が相手国の市民に直接か
 つ率直に話し合うことができるようになるために
 こそ必要であるといえる。

そして、第三に、ナシヨナリズムと国家観の問
 題がある。もとより日本は、台湾問題や各種の国
 境問題を抱え、ある意味では国家統一の道程を完

成したとは言い難い中国が、ナシヨナリズムを鼓舞することに對して、十分理解しておく必要はあるが、他方、そこに日本との違いがあることを意識して行動せねばなるまい。

日本は、今や自己規定のために、伝統的な意味でのナシヨナリズムを必要とはしていない。むしろ、日本の現在の（表面的には）自己喪失とも見えない状態は、裏を返せば日本国民の大半が、戦争や紛争につながりかねないナシヨナリズムをもつて排除すべきものと見なしていることを暗示している。

そもそもグローバル化した世界の中で、国境の意味は変化し、そして人類共通の課題が多く、また大きく浮上している。こうした人類共通の課題への取り組みへの熱意とそれに努力する国たる日本こそが、伝統的な意味でのナシヨナリズムを超えた日本の新しい自己規定であつてよいのではあるまいか。

例えば、アフガンの陶工を日本に招待してアフガンの内戦で破壊された陶芸場の再建に協力する

こと、あるいはインドネシアの内戦で敵味方に分かれて心に傷跡を負った子どもたちの心の「癒やし」のために子どもたちの演劇団を派遣すること——そうした広い意味での平和構築の過程での心の癒やしと心の再建のための文化外交こそ、これからの日本外交の柱の一つであるべきであろう（なお、そのような日本の新しい自己規定は、決して中国と対立、対抗するものではない。中国と政治的理念をできるだけ共有してゆくことこそが、経済的相互依存関係を「共同体」にまで育ててゆく上での不可欠の前提と考えられるからである。そしてまた、大国となった中国がその国際的責任を果たす上で、日本とパートナーシップを組んでゆくためにも、日本の新しい自己規定は長期的に役立つであろう）。

「力」の保持と開眼

こうした新しい自己規定に基づく外交は、ある意味では、理念と信念に基づく外交という側面を持つ。これまでの日本外交が国際的批判への対応

と自己発展目標との融合の上に成り立っていたとすれば、今後は（新しい自己確立のためにも）一定の国際摩擦も止むを得ないとする外交に転換する必要がある。それには、そうした外交を裏打ちする軍事力、経済力、そして政治力が必要である。

国連の下における軍事的行動への貢献、アジアの経済力と日本経済との結び付きの強化、そして国内情勢の安定と国際的人材の育成といったことなしに、日本の明日の自己規定はできないであろう。理念は力を必要とする。しかし同時に、力の行使は理念なくしては墮落する。日本はその意味では、もう一度日本が近代国家として自らを確立しようとした百年前の原点を思い返す必要がある。今からほぼ百年前、ある詩人は当時の日本を次のように表現した。

堅苦しく、うはべの律義を喜ぶ国、
しかも、かるはづみなる移り気の国、
支那人などの根気なくて、浅く利己主義なる
国、

亜米利加の富なくて亜米利加化する国、
疑惑と戦慄とを感ぜざる国、

男みな背を屈めて宿命論者となりゆく国、
めでたく、うら安く万万歳の国。

今日の日本も、全く同じではありませんか。

そう、この詩人は言うであろう。

この詩人こそ与謝野晶子その人である。

我々はこの原点に立ち返って、もう一度自己規定をやり直し、その上に立って広報文化外交を展開せねばなるまい。

小倉和夫

おぐらかずお

国際交流基金理事長、青山学院大学特別招聘教授。

1938年生まれ。1962年東京大学法学部卒業、1964年ケンブリッジ大学経済学部卒業。外務省文化交流部長、経済局長、駐越大使、外務審議官、駐韓・駐仏大使等を歴任後、2003年より現職。著書に『パリの周恩来』（中央公論社、1992年、吉田茂賞受賞）、『西の日本、東の日本』（研究社出版、1995年）、『中国の威信、日本の矜持』（中央公論新社、2001年）、『吉田茂の自問』（藤原書店、2003年）、『日中実務協定交渉』（岩波書店、2010年）など。